Walther von der Vogelweide の宗教感情

石川敬三

ワルターが宗教的であつたとは殆どすべての文學史家のいふところである。この世界が神意の映像にほかならず、すべてが神との聯關に於いて考へられた中世の代表的抒情詩人としてこれまた當然のことのやうにも思はれるのであるが、事實は如何であつたらうか、今ここではそれを彼の個々の作品について考察してみたい。

中世の抒情詩人の中でも珍しく Lied, Spruch, Leich と Minnesang の全種目にわたり、凡そ八十の Lied と百餘の Spruch と一つの Leich といふ當時としては異數に多くの作品を殘してゐる彼の詩作の中で純粹に宗教的な題材を取扱つてゐるのは、僅かに一つの Leich と二つの Kreuzlied と數篇の Spruch に過ぎないのである。

ここでは先づ Leich から見て行かうと思ふが、Leich といふのは、各詩節が同一の構造を、從つて同一の旋律を持つてゐた Lied とは違つて、異なる構造と旋律とをもつ詩節が幾度か反覆され、對應、交錯するところの複雜多岐な一詩型である。從つて量的にも概して大部のものであり、極度の技巧を要するため、中世に於てもこれを試みた詩人は極少數であつたが、これはまた內容上から Minne を題材とするものと、宗教的なものとに大別され、後者に屬するワルターの Leich (Lachmann 版三頁一行より。以下作品番號は之に倣ふ) も二十九節、百五十行に及ぶ尨大なものである。—

今その內容を概觀すると、先づ「神よ、汝の三位一體を……我等信ず」とキリスト教々理史上の大問題であつたあの三位一體の告白より始まり、惡魔の誘惑と肉體の弱さとが我等を樣々の罪に導き神より遠ざけたと述べ、神に向つてその力もて我等を再び神のもとに歸らしめ給へと願ふ。その時こそ神と聖母マリアの御名が稱へられんと云つて、ここで聖母マリアの讃美にうつり、淸淨受胎や神卽ち御子キリストが人間となられた奇蹟を述べ、またしても聖母とキリストに守護を願ふ。といふのは彼等なくしては何人もこの世に於いてもあの世に於いても救はれることはないからである。もしこれを否定する者があれば、それは愚者に相違ない。ここで一轉して悔悟のことが述べられ、己の過失を心から悔いない者がどうして助けられることが出來よう、神は常に心の奧底

から悔いた罪でなくてはお赦しにならない。然し我々が悔いるのは稀であつて頑な心に眞の悔いを與へることの出來るのは聖靈である。それ故に我等に聖靈を遣はし給へと父なる神と御子キリストに願ふ。ここで更に再轉してキリスト教界の腐敗にうつり、キリスト教界には非キリスト教的な事柄が充滿してゐる。キリスト教は今や病の床に臥し、ローマよりの教へを空しく待つてゐる。だがこの惱みはみな Simonie から來てゐると云つてローマ教皇を攻擊する。卽ち全キリスト教界が名實共にそなはつた眞のキリスト教をもつべきであつて、口先きだけで實行を伴はぬキリスト教徒は半ば異教徒である。これが我々の最大の惱みであつて、言と行とは相伴はなければどちらも空しい。神よ、我等にこの兩者を得させ給へ。惠み深き聖母よ、我等の爲に彼の怒りをやわらげ給へと再び聖母に向ひ神の許に於ける執成を願ふ。そして最後にもう一度我等の過失に對する不斷の悔悟により我等の罪を拭ひ落すやう助け給へ。悔いは神と汝をおきては與うるものなし、と云つて終つてゐる。

以上に見るやうにこの詩の大部分を占めてるのは三位一體、聖母マリアの處女性、キリストの死による救濟、眞の悔いの不可缺と云つたやうなキリスト教信仰の主要題目の告白であり、それもその當時支配的であつたアタナシウス信條のそれであつて、當時の一般の信仰から一歩も出て居らず、そこには特に個人的主觀的告白と思はれるものは殆ど認められない。そしてそれも特に熱をもつてなされてゐるとは見えず、寧ろそれから受けるのは理路整然たる理智的な印象である。ただその中でいくらか情熱的と思はれるのは聖母マリアに關する部分（四・二より五・三八までで、全體の約半分に當る）であつて、ここでは數世紀來の傳統によつて集められたありとあらゆる盛り澤山の譬喩と形容（その多くは Aaron の花咲く杖等舊約聖書より取られ、中世の殆どすべてのマリア抒情詩に共通する）が述べられてゐるが、これとても Gottfried von Strassburg の名で傳へられゴットフリートやワルターよりも後の十三世紀末の作と考へられる作者不明の「マリア並びにキリスト讃歌」等に較べればそれ程情熱的とも思はれないのである。この聖母崇拜は中世前半にはまだそれ程でもなかつたのが、十二世紀以降世界終末の信仰の影響などもあつて、人類の罪業を怒れる神と罪深き人類との間のキリストに次ぐ第二の仲介者として、彼女は益々崇拜されるやうになり、これがやがて文學にも現はれて、マリア讃歌となり、Marienklage ともなつたのであるが、ワルターの立つてゐるのはまだ合理主義的なドグマの立場であつて、神性をもつ惱みなき者としての、マリアに庇護を求め讃美はするが、惱める者として同情を捧げるには至つてゐない。（なほ彼の名で傳へられてゐるものの中にマリアの歎きを歌つた Spruch [I, 36, 31] があるにはあるが、然しこれは彼の作とは認められてゐない）。

ただ一つ異樣に感じるのはワルターがまたしても眞の悔悟を缺くべからざるものとしてあげてゐる事である。これは彼が宮廷的ミンネに對してなしたと同じことを宗教に對してしたのであつて、當時行はれてゐた教會主義の因襲的な形式的信仰に對する反撥、宗教の深い人間的把握とも見られ、そこに何かワルターらし

いものが感ぜられ、後のルターを思はすものがないでもないが、然しこの救ひには缺く事が出來ないとする悔いも聖母の執成により、神より聖靈の手を經て與へられると云ふところに中世らしさが感ぜられる。(原詩は十二世紀末の作と思はれる Muri の Marienesequenz の中にもマリアに向つて「あなたの御子はあなたの願を拒むことは出來ない。私に眞の悔いをお與へ下さるやう彼に賴んで下さい」〔二九—三〇〕といふところがある)。

一方悔悟を强調したのは、當時のローマ教皇インノセント三世によつて一層激化された Simonie への面當てであることは確かであつて、この詩の中でも終りに近いところでキリスト教界が眞のキリスト教から離れたことを歎き、これを偏にローマ教皇の罪に歸してゐる。これは教權至上主義の實現をはかつたインノセント三世と爭つてゐたオットー四世のもとで、一二一二年から一二一三年にかけて彼が作つた教皇攻擊の痛烈極まる一連の Spruch と相通ずるものがあり、この詩の成立期もそれ等と略同時代か或は僅かに遲れるものと思はれる。當時は教皇權全盛の時代であつたとはいへ、シュタウフェン王朝の庇護の下に詩人達は教皇や教會や僧侶について自由に考へ、また自由にものを云ふことが出來たのであつて、Wolfram von Eschenbach の場合にも見られるやうに教皇權からの離脫はこの時代の特色であるともいへる。であるからワルターの場合も教皇誹謗の故をもつて彼の信仰を云々することは出來ないのであるが、然しこれが純然たる信仰告白ではなく、この詩には前にも述べたやうに政治詩的な一面のあることも見逃せない。更に又當時の抒情詩が近代のそれとは異なり、讀者が銘々勝手に讀む詩 Leselyrik ではなく、多くは作者たる詩人自身に依つて宮廷等の集りの前で歌はれ、常に集團の意向や趣味を無視することが出來ず、その集團よりの制約を免れなかつた Gesellschaftslyrik であつたことを念頭に置くならば、今この詩の性質もおのづからわかるやうな氣がする。卽ちこれは彼一個人の信仰告白ではなく、彼が Holdichter として屬してゐた集團のために集團の名に依つてなした信仰告白と見るべきであらう。勿論その場合內容はその集團の意向に依つて制約されはするが、然しその表現の仕方には作者である詩人自身の氣持が反映することは云ふまでもない。

次は Kreuzlied であるが、これにも十字軍への參加を勸誘する純粹に宗教的なものと、十字軍參加の爲の愛人との別離や、世俗的愛と神への愛との葛藤を取り扱つたミンネ的なものとあつて、後者は樣々の內容を持つが、前者はその當時盛に行はれた十字軍參加勸誘の說教と略似た內容を持つてゐる。「神(卽ち人間となられたキリスト)は我々の爲に受難し給うたのであるから、我等はそれに報いなければならぬ。我等の罪に對する神の怒りが聖地を失はしめ給うたのであつて、それは我等の相續財產であるから、我等は失地を回復しなければならない。この戰への參加は天國に於いて優位を請求する權利を與へる」といふのが說教の要旨であるが、宗教的十字軍の歌に於いてもこのやうな內容が色々に變形されて歌はれるのが常である。Vil sieze waere minne (76, 22) で始まるワルターのもこれに近いのであるが、ただそれといささか趣を異にしてゐるのは、Burdach その他が云つてゐ

るやうに、これは十字軍參加の人々が歌ふ爲に作つたコーラス用のものであることである。そしてここでもキリストの事蹟が斷片的に述べられ、その間に神卽ちキリストや聖母に向つて救助を願ひ、同志に向つて十字軍への參加を勸誘するのであるが、もともとコーラス用のものであるから、全篇主語も一人稱又は二人稱の複數形であつて、そこに個人的主觀的告白の入る餘地のないのは云ふまでもない。

もう一つの Allerêrst lebe ich mir werde (14,38) は、前のが聖地到着前の十字軍の歌であるのに對して、これは聖地を踏むことが出來た者の立場から歌つてゐて、

今ぞわれ價値ありて生く、
わが罪ある眼
きよき國、みな人の
ほめたたふる地を見たれば。
わが日頃の願叶ひ
われは來たれり、
神、人となりてさまよはれし地に。

といふ第一節に續いて、第二節以下ではこの地で起つた奇蹟、卽ち處女マリアに依るキリストの降誕から洗禮、受難、冥府くだり復活、昇天、最後の審判の豫言と型の如くキリストの生涯が整然と述べられ、最後の節で

キリスト者、ユダヤ人、はた異敎の者
この地をば己が世襲の地なりと主張す。
神よ裁き給へかし
そが三位一體のため。
世はこぞりてそを得んと爭ふ。
我等の願こそ正しけれ、
我等の願叶へ給ふぞことわり。

と云つてゐる。

以上に見るやうにその大部分はキリストの生涯についての記述に當てられ、ワルターが自己に關して云つてゐるのは第一節だけであるが、ここで問題となるのは、ワルターがその第一節で云つてゐるやうに果して聖地に足を踏み入れたことがあるかどうかといふことである。これには兩說あつて始めはこの詩句をそのまま信じて肯定說が有力であつたが、今では否定說の方が優勢である。實際この詩を繰り返し讀んでみても長年の願が叶へられたといふのに、あの一二二〇年皇帝フリードリヒ二世から長年望んでゐた采邑をもらつた時の Spruch (28, 31) に示されたやうな赤裸々な喜びの感情は少しも感じられない。この事から見ても、これはワルターの個人的な歌といふよりは、寧ろ前の Leich やコーラス用の十字軍の歌と同じ意味で、矢張り集團のために作つたものと見るべきであらう。Schönbach はこれをフリードリヒ二世の委託に依つて作つたものといつてゐるが（事實これは約一世紀半前巡禮行といふ同じやうな目的のために作られた Ezzoslied と內容の上からも非常によく似てゐる）、もしさうだとすると、ここに用ひられてゐる ich は作者の ich ではなくこの詩を歌ふ者の ich であつて、Leich や初めの十字軍の歌で用ひられてゐた wir と略同じものと見られ、（なほこの詩でも最後の詩節では主

語は wîn になつてゐる)これ等は何れもワルターの個人的主觀的告白とは思へないのである。かう見て來るとワルターの宗教的抒情詩の中でも純粹に個人的主觀的なものと云へるのは驚く程少い。

さて次に宮廷的傳統に依つて束縛されてゐた Lied とは違ひ、ワルターが騎士階級出身の詩人としては初めて吟遊詩人の手から受け取り、その中に自己の信條を吐露し、彼の內外生活の跡が比較的よく殘されてゐる Spruch を見ることにするが、この百に餘る Spruch の中でも宗教的內容をもつものは數篇に過ぎないのである。その中の一つ、作品 10, 1 では

大いなる神よ、汝は
我等そを考ふるは無益なる程大いなり。
汝の力と無窮とははかり難し。
われそを考へあぐむ者あるを知る。
そは今も昔も我等の知力の及ばざるところ。
汝は餘りにも大きく餘りにも小し、そは捉へ難し。
そがために日に夜を費すは愚なる痴者。

說教にても教義にても究明せられざるものを、知らんとやはする。

と云ひ、前の Leich や十字軍の歌に於けるドグマ的合理主義的態度とは反對に、神の探究し難さが强調されてゐて、そこには神祕思想が見られるのである。然しこれはワルターには全く異質なものであつて、他には殆ど類を見ない。氣分の上でそれに近いのは僅かに一篇

祝福もて今日われを起たしめ給へ。
主なる神よ、われいづこに向ふとも
汝の庇護の下に馬乘り行かしめ給へ……

と素直な信心深い朝の祈りのうちに天の祝福がわが身を訪れんことを求める作品 24, 18 だけである。

次の作品 22, 3 では「神よ……汝を父と呼びながら、われを兄弟とせざる者は弱き心もて强き言いふもの。我ら等しきものより造らる……蛆、肉を食み、白骨となれるを見なば、誰か主と僕とをわかたん」といつて人間の平等を主張してゐるが、これは Dilthey も云つてゐるやうに、諸所の宮廷で廷臣との隔りを嫌といふ程感じさせられた遍歷の詩人が、すべて人間は兄弟であるといふキリストの教へでもつてわれと我が身を慰めてゐるとも思はれそこには單なる宗教感情といふよりは可なり理詰めなものがあるやうに感じられる。そしてその終りのところで「キリスト者、ユダヤ人、はたまた異教徒も、仕ふるは生きとし生けるものを蓋ひ給ふ御方」といつて人種や宗教を乘越えた寬容を歌つてゐるのは、異教徒の手から聖地を奪還するために十字軍まで起こしてゐた當時としては異常のことのやうにも思はれるが、然しワルターは前の Leich でもキリストと聖母に依る救濟を否定するものは愚者に相違なしといつて、ニカヤ信條やアタナシウス信條の呪咀章句に比し、異端者に對して著しく寬大であつたのであつて、いま異教徒に對してさへこのやうな寬容さを示してゐるといふのは偏見に捉はれることの少いワルターの知性から來てゐるやうに思はれる。ウォルフラムも Parzival や Willehalm で異教徒に對

して差別待遇をして居らず、ブールダハはこの Toleranz をワルターとウォルフラムの共通點の一として擧げてゐるが、然しウォルフラムの場合は、すべてを verittern したといはれる彼の騎士道から來てゐるのであつて、ワルターの場合とはいささか事情が違ふやうに思ふ。

今一つオットー四世から離叛した時の作である Spruch (23, 3) では

いともほまれ高き神よ、われの汝を稱ふこと何ぞ稀なる！
われ汝より歌作り節作る技を授かるに
汝が支配の下、などかくも不遜なる。
われ正しき行をなさず、まことの愛を
わが同胞にも、主よ、汝にも持たず。
彼等の一人をも我が身程には愛さざりき。
父にして子なるキリストよ、汝の聖靈をして我が心を正さしめ給へ。
われいかで、われに仇なすものを愛し得ん。
われによきことなすものこそ、まさりて好ましけれ。
わが餘餘の罪は赦させ給へ、されどこの心變へんとは思はず。

と云つてゐるが、これになるとこれまでのすべての宗教的抒情詩とは異なり、個人的であるばかりでなく最も人間的な告白といふことが出來よう。これはまたいとも敬虔なる祈りに始まり、いとも不敵なる告白に終つてゐる。普通の者ならば主の禱にもあるやうに、我らに負債（おひめ）ある者を免したる如く、我らの負債をも免し給へ、といふところを、自分は相手のおひめを免さうとは思はないといふのであつて、そこには如何にもワルターらしい正直さが現はれてゐると思ふ。然しこれは Böhm も云つてゐるやうに、もはや宗教的な人の祈りではなく、倫理的な人の告白である。なほこれ等のほかにも神への呼びかけは時々見られぬではないが、然しそれはもはや信仰の對象としての神ではなく、倫理的對象としての神、世界秩序の維持者としての神である。

このワルターの倫理的傾向は既にその初期の作品から現はれてゐるのである。一一七〇年頃生誕したものと推定されるワルターは 32, 7 の Spruch でもいつてゐるやうに、當時 Reinmar von Hagenau が君公その他の寵を得てゐたウィーンの宮廷で作詩作曲を學んだのであつて、その頃の作品と目されるものはラインマル流の所謂 Hohe Minne——騎士は婦人を一段高いものとして崇め、身分の高い既婚の婦人に求愛し愛の奉仕をするのであるが、ミンネの報酬はそれ自身の中に、卽ち騎士がこのやうなミンネによつて完成へと教化されることにありとする Hohe Minne の領域に屬してゐて、「清い婦人への求愛を欲しない者は何にならう。たとへその願は聽かれなくてもその人を高貴にする」とか、「よき婦人の愛をもつ者はすべての惡しき行爲を恥ぢる」とか云つてゐる Lied (92, 9) 等が戀愛歌でありながら倫理的色彩の濃いのは異とするに足らぬが、それにしてもこれ等を當時の他の詩人達の作品と比較してみると、ワルターのには倫理的な面が特に強く出てゐるやうに思はれる。その後、人間性の眞正のすがたを探求せんとする彼が所謂 Hohe Minne の如き宮廷の因襲に束縛された不自然な愛の生活に慊らず、この宮廷的ミンネの定型を破つ

て、身分低く年若い少女との所謂 Niedere Minne――それ迄のただ一方的に捧げつくす愛ではなく、心から心への愛、相愛を歌ふやうになつた時でも、相手に求めてゐるのは決して官能的な卑俗な愛ではなく、また美しさ schoene よりも寧ろ誠實 triuwe と恒常心 staetekeit なのである (49, 25)。即ち彼は婦人として貴いのは身分や富や美しさにあるのではなく、その淑德にあり眞心にあることを強く主張してゐる。

このやうにミンネがその主要な題目となつてゐる Lied に於いてさへ、彼はややもすれば眞のミンネや道義や德性に就いての倫理的考察に陷つたのであるが、あの教皇攻擊のそれのやうに主君の政策を代辯する政治詩のやうな公的なものから個人的不滿や願望を述べた私的なものに至るまで、非常に廣い範圍の內容が盛られてゐる Spruch に於いても彼は屢々一般的價値や道德について語つてゐる。このやうな倫理的教訓的傾向はもともと彼の素質に於ける本質的要素の一つであつて、道德的生活の可能性の問題は生涯を通じて彼の念頭を離れなかつたのである。ブールダハ等に依りワルターの最初の政治的 Spruch と見做され、また Minnesang の寫本 B 及び C の畫像のもともなつてゐる作品 8, 4 で「石の上に腰かけ、膝と膝とをかさね、その上に肘をつき、顎と頬とを掌に支へて」彼がつらつら考へたのも、「この世に於いて如何に生くべきか」といふことであつた。これをもつと具體的にいふなら、財貨 guot と名譽 êre と神の恩寵 gotes hulde とを、如何にすれば同時に手に入れることが出來るかといふことである。この三つのものについてはここだけではなく 20, 16; 22, 18; 22, 33 の Spruch その他でもいつてゐて、もとより神の恩寵と名譽は財より重んぜらるべきであり、就中神の恩寵が最高のものであるとは屢々いつてゐるが、然し 22, 33 では「財を餘り輕んずれば、それがなくなると喜びも失はれる」といつて財の重要性を云ふことも忘れてはゐないのである。

さて今その他の作品をも考慮に入れて、彼岸の神の恩寵と此岸の世俗的な名譽並びに財が彼の世界觀に於いて占めてゐた比重を考へてみると、暗黑時代と呼ばれた中世のさ中に咲き出で、或る意味では中世に於けるルネッサンスともいふことの出來る宮廷的騎士文化が神にも人にも愛されるのを理想としながらも生活の重心を彼岸から此岸に移してゐたやうに、シュタウフェン時代の代表的詩人であつた彼ワルターにとつても生活の重心は彼岸よりも此岸にあつたといふことが出來よう。少くとも中年時代までのワルターは、此岸に根ざし、常に努力して人間一切の高貴な力を發展せしめ、教會的禁慾とは別に、眞の敬虔に向つて獨自の道を進む眞正の宮廷的騎士文化の福音を信じてゐたと見るべきであらう。

「愛情あつてするのなら、戀人同志大いに怒つてよろしい……。輕く怒つて激しく仲直りするのが愛の道」といふ人情の機微を穿つた一節（これはもはや所謂 Hohe Minne ではない）の入つてゐる一群の中に「私は私の日々程速かに過ぎ行く日を見たことがない。私は始終、去り行く日を見送つてゐる。彼等が何處へ行くのか、また何をそんなに急ぐのか知りたいものだ。ひよつとしたら私のところから私程にも大事にしてくれない人のところへ行く

のかも知れぬ。誰のところへか、知つてゐるなら云つてみるがいい」といふ意味の一節（70, 8—14）があつて、これはワルターの中年までの作と思はれるのであるが、休みなく過ぎ行く時の流れに對する哀愁をよく現はしてゐると思ふ。またその他の詩に於いても生の喜びを歌ひながら時々その喜びのさ中にすべての喜びの儚さに對する意識が通り雲のやうに影を落すことがある。然しまだその頃は彼の生活感情を支へてゐるのは現實的な倫理感であつて、彼岸への逃避は起つてゐない。それが次第に年老い（彼は一二三〇年頃まで、即ち六十歳位まで生きたやうに思はれるが、平均壽命の今より遙に低かつた當時としてはこれは非常な高齢である）、彼と略同じ頃（一一七〇年頃）に生れたシュタウフェン時代の代表的詩人 Hartmann von Aue は四十五歳位で、ウォルフラムとゴットフリートとは約五十歳で死に、一二二〇年代には彼がただ一人生き殘つてゐて、彼が一生の理想とした宮廷生活の道德的衰頽を目にし、又彼が Vagant の民衆文學から新しい血を注ぎ入れてもり育てた宮廷抒情詩が粗野なものにと變形して行くのを見た時ワルターの心は次第に暗くなつて行く。

「我が見し心の喜びには常に心の惱み伴ひぬ」とか「われはただの半日も全き喜びもて過ごせしことなきもの。かつて享けし喜び悉く我がもとを去る。明き花の輝きの如、うつろはざらん喜びを、誰かこの世に見出さん。さらばわが心はや僞りの喜びをばゆめ願ひそ」とか歌つてゐる作品 41, 13 で「われもの思ひに耽る時、人われに話しかく……我が心ここにあらざれば、答へんすべもなし」といつてゐるが、この返事も出來ない程耽る思ひといふのは、もはや戀の憧れではなくて現世の幸福の空しさに對する思ひであらう。このことは次の作品 100, 24 になると一層はつきりする。

前に作品 59, 37 で

浮世よ、お前がその樣にのたうち廻るなら
お前にどの樣にかしづけばよいのか。
お前は私から逃れられると思ふのか。
いや私だつてのたうちまはつて見せる。
お前がどんなに急がうとも、私がお前を袖にするのは
もつとずつと先きのことだ。

といつた浮世夫人 Frau Welt に作品 100, 24 でははつきりと別れを告げてゐる。ここでは浮世を惡魔の經營する居酒屋の女に見たて、彼女と詩人との對話になつてゐて、第一節は詩人の言葉で、永い間そこの顧客であつた詩人は莫大な借金を支拂つて別れを告げる。といふのはいつ迄もここの負債者になつてゐるのはユダヤ人に借りた以上に恐ろしいからである。第二節は浮世夫人の言葉で「ワルターよ、そなたは故なく怒つてゐる」と彼女はおもねるやうに答へて、過去の思ひ出と將來の約束とで彼を引き止めようとする。第三節は再び詩人の言葉で、

浮世夫人よ、私はあまり永い間乳を吸ひ過ぎたようだ。
私はこの習慣を止めようと思ふ、今がその時だ。
そなたの愛撫にもう少しで瞞される所だつた。
といふのはそれは多くの甘い喜びを與へる。
そなたを前からまともに見ると

そなたはまことに眉目うるはしかつた。
だが、そなたの背中に氣がついて見ると
私がいつ迄もそなたを罵るであらう樣に
そこには無氣味なものが充ち滿ちてゐた。

最後の第四節は浮世夫人の言葉と詩人の言葉とが半々になつてゐる。

「そなたの氣持を變へさせることが出來ないのなら
せめて一つ私の願を聽いておくれ。
そなたが退屈した時だけでも
幾日かの樂しかつた日のことを思ひ出して
たまには私のところを覗いておくれ」。
「出來ることなら、私もどんなにかさうしたい、
だが私は、誰も逃れることの出來ぬそなたのわなを恐れる。
夫人よ、お休み、
私は宿へ行かうと思ふ」

この中に出て來る浮世夫人が前から見れば輝くばかり美しいが、一度背後に廻るとその背中には蛇や蠍や虫が充滿し蛆がわいてゐるといふのは、中世によく行はれた譬喩であつて、ワルターよりは後の作家であるが Konrad von Würzburg の Der Welt Lohn やその他にも見られ、これはまた文學作品ばかりでなくウォルムスの大伽藍の南支關にある十四世紀初頭の彫刻——前から見れば大きな浮世夫人の裾に小さな騎士が縋りついてゐるがその背中には前記の動物がうようよしてゐるあの石像にも窺はれる。またこの擬人化はワルターの得意とするところであつて、これまでにも Frau Minne, Mâze, Saelde と幾多の抽象名詞を擬人化してゐるが、今度の場合これはもはや單なる手段ではなく、全く生きた人間になり切つてゐる。そして對話のうまさもこれまでに 43, 9 や 85, 34 等の Lied に見られたが、これは實に劇的であつて、言葉すくない中に轉心せんとするワルターの氣持がにじみ出てゐる。

今一つ彼の晩年の氣分のよく出てゐるのは、成立年代のわかるものでは最後の作品で、一般には Elegie と呼ばれてゐる作品 124, 1 であつて、これは皇帝フリードリヒ二世の命を受け、一二二七年オーストリアの騎士達に十字軍への參加を勸誘するために作つたものと思はれる。この詩で彼は先づ人生一夢といふ彼自身の晩年の氣持を述べて聽く者に無常感を起させ、それから、外は美しく內は死のやうに暗い「浮世」(夫人) に誘惑された者も些細な償ひで重い罪を免れることが出來るといつて、十字軍への參加を勸めるのであるが、その無常感をそそる第一節は特に素晴らしい。

悲しいかな、わが年月すべていづこに去りし
わが生涯は夢なりしや、はた眞(まこと)なりや。
ありと思ひしものすべてありしにや
われは眠りてそを知らず
今われ目ざめて、かつては己が手の如、
知りにしものを知らず……

長い眠りからさめてみれば、故鄕の山川草木悉く變り果てて、道行く昔の友も今は自分を識らないのである。畢竟するに人間の

この世の勞苦はすべて空しい夢に過ぎない、すべての幻影は消え去り長らく魅力をもつてゐた理想は到達することの出來ない彼方に姿をかくして、希望や愛から目ざめた彼の前には、かつては輝かしくうるはしかつた世界が恐ろしい死の淵を開いてゐるといふこの生死の境に立つ老詩人の祕めたる苦痛がこの詩に限りなく痛ましい調子となつて現はれてゐる。そしてこれを現はすのに「すべて喜びは悲しみに終る」といふあのオーストリアの騎士達にはなじみの深い Nibelungenlied の詩型を用ひてゐて、その雄大なる格調といひ崇高なる心境といひ、齡六十に垂として愈々圓熟した彼ワルターの力量の程が知られる思ひがする。もはやここに至つては宗派を絶し、理窟を拔きにした宗教的境地といふことが出來よう。

最後にもう一つ此岸から彼岸への轉心を語つてゐる詩 (66, 21) がある。これの成立年代ははつきりしないのであるが、その中で自分は四十年かそれ以上もミンネのことを歌つて來た」と云つてゐるのを見ても、これが餘程晩年の作、恐らく最後に近い作であることが想像される。そしてこれは編者に依つては初めの二節と後の三節が引離されてゐて、後の三節の順序もまちまちであるが、いま Kraus のそれに從ふと、この詩の第三節では

「浮世よ、私はお前の報酬を見た。お前は一度くれたものを取上げ、私達はみなお前から裸で別れる……」といつて、浮世の空しさを、第四節では「私はかつて美しい姿を選んだが、私が心を傾けたものは美しさと言葉とを失つた……」といつて、世俗的愛のはかなさを歌つてゐる。そして最後の第五節で「わが魂に幸あれ！私はこの世で男女とも多くの人を喜ばせた。私自身の魂の救ひをはかることは留守にして！　だが私が肉體のミンネをほめれば、魂は悲しむ。彼女（魂）はそれは僞りであり、氣違ひ沙汰であるといふ、眞のミンネこそ不變であり、素晴らしくとこしへであるといふ。肉體よ、お前を見捨てる愛を捨てよ。そして不變の愛を尊重せよ。わたしにはお前が目指した愛は本物ではないやうに思はれる。」といつてゐるが、勿論ここに云ふ「眞のミンネ」は、ハルトマンが彼の抒情詩としては最後の作品であり、その中で主君の死後十字軍參加のために知人や親戚に別れを告げてゐる Lied (Minnesangs Frühling 218, 5) でいつてゐるあの「ミンネ」と等しく、男女間の人間的な愛に對して神への愛をいつてゐることは明かであつて、彼ワルターが最後に辿りついたのもこの眞のミンネ、神への愛であつたのである。

そしてここで云つてゐる肉體と魂（精神）、ひいては世俗生活と宗教心との二元的對立は、中世の生活や文學にはよく見受けられる對立であつて、この二つが如何に調和されるかは甚だ興味ある問題である。世俗的騎士小說 Erec 執筆後、このやうな世俗的な物語を書いたことに罪惡感をすら抱き、その罪滅しにといつて宗教的敍事詩 Gregorius や Armer Heinrich を書きながら、その後再び Iwein に於いて、罪とその贖ひの問題を取扱つてゐるとはいへ、徹頭徹尾世俗的な騎士生活を描くに至つたハルトマンはこの相異なる兩方面を渾然たる一つの世界に統一することが出來ず、結局對立を對立のままに終らしめて居り、Parzival の終りで「肉體の罪に依つて魂を神より奪ひ去ることなく、しかも同時

に世の寵愛を立派に保持することが出來るやう、生涯を終る者こそ有益な仕事をしたのである」と云つてゐるウォルフラムに於いて初めてこの對立は高次の綜合に達したのであるが、Paul はこのウォルフラムとワルターとを對比せしめて「ウォルフラムに於いては宗教心と世俗生活とが渾然融和してゐるのに、ワルターにあつてはこの二つは全く確然と對立してゐる。それは並存してゐるといふよりは相前後してゐる」と云つてゐる。

さて以上を振り返つてみるのに、ワルターの數多くの作品の中で宗教的と云へるのは非常に少く、またそれ等の內容から見ても彼と略同時代の詩人達 Friedrich von Hausen や Hartmann や Albrecht von Johannsdorf——特に Willehalm の初めのところで神に向つて「汝は父にして我は子なり」と言ひ切つてゐるウォルフラムに較べると、ワルターの宗教的欲求が遙かに少かつたことは明かである。彼の作品を全體的に見て、彼が所謂宗教的詩人であつたとは思へないのである。彼の作品の多くに感じられるのは寧ろ明確な論理を辿る知性であり、常に人間としての誠實を示してゐる倫理性であつて、彼の本質は宗教的といふよりは寧ろ理智的倫理的な人間であつたといふことが出來ると思ふ。といつても晩年になるまでのワルターも、合理主義的傾向を示してゐる點では相似てゐるゴットフリート程、宗教に對して冷淡であつたわけではなく、普通の中世人のもつ程度の信仰は持つてゐたのである。ただすべてに批判的であつた彼は當時の形式的信仰をそのままわが物とすることが出來ず、宗教をもつと自由に人間的に把握してゐたやうに思はれる。そしてその信仰生活に於いてさへ言と行との一致を强調してゐるところに彼の倫理性が感じられるのであるが、彼の場合は宗教心が缺如してゐたといふよりは世俗心と宗教心の比重が中年までは遙かに世俗的なものの方に傾いてゐたのであつて、それが晩年になつて彼岸に傾いたのだと云へよう。これは見方に依つてはパウルの云つてゐるやうに nebeneinander といふよりは nacheinander であつたといへないこともないが、然しこの此岸より彼岸への推移は徐々に起つたのであつて、殊にそれまでも彼が倫理的な人間であつたためにこの轉心は Neidhart von Reuental の場合に於けるやうにそれ程唐突には感じられないのである。

寧ろワルターの場合晩年になつて次第に宗教的になつて行く氣持はよくわかるのであるが、然しこの晩年の宗教心なるものをもう一度よく考へてみると、勿論その氣持に僞りがあるとは思へぬが、然しその信仰はどちらかと云ふと現世を否定した後に到着した消極的な信仰であつて、前記の人々がもつてゐたやうな謂はば積極的な信仰とは區別さるべきものだと思ふ。そしてワルターは晩年になつて宗教的境地に到達してからでも矢張り信仰ひとつに縋ることは出來ずに、さきに擧げた作品 66, 21 の第二節で

たとへ身は乞食の杖に縋らうとも
わが幼少の頃よりなせしが如く
撓まざる努力もて
內なる價値を目指して努めなば
身は低くとも、われも貴人の一人…

といつてゐるのにも見られるやうな氣持がまだ多分に殘つてゐた

そこに思はれるのである。

なほ以上に用ひたテキスト及び文献の主なものは次の通りである。

Lachmann-Kraus, Die Gedichte Walthers von der Vogelweide.
Pfeiffer-Bartsch-Michel, Walther von der Vogelweide.
H. Paul, Die Gedichte Walthers von der Vogelweide.
K. Burdach, Walther von der Vogelweide, I.
dito, Der mythische und der geschichtliche Walther, (aus dem „Vorspiel" I.)
A. E. Schönbach, Walther von der Vogelweide.
H. Böhm, Walther von der Vogelweide.
W. Dilthey, Von deutscher Dichtung und Musik.